
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

小 台 遺 跡 (第3次)

1987.3

埼玉県深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

こ だい
小 台 遺 跡 (第3次)

1987.3

埼玉県深谷市教育委員会

序

小台遺跡は、今から丁度30年前の昭和32年に、周辺の畑などから縄文土器片や石器などが出土したことがきっかけとなり、初めて学術的な発掘調査が実施されました。この時に縄文時代の住居跡が発見されたことは、当時としては画期的なでき事でした。深谷市内だけでも年間数件の発掘調査を行っている現在を考えると、まさに隔世の感がいたします。その後小台遺跡は、昭和53年に道路建設工事に伴い再び発掘調査が実施され、さらに昭和56年の深谷市遺跡詳細分布調査により、市内でも有数の縄文時代の大遺跡であることが確認されました。

最近になりまして、小台遺跡の近辺は住宅の増加が著しくなり、このたび、個人住宅の建設に伴い第3次発掘調査を実施いたしました。当該地にはいわゆる遺物包含層が形成されており、多数の縄文土器片や石器が出土しました。その遺物の一つ一つが悠久の彼方に忘れられていた先人の歴史を雄弁に物語ってくれます。イギリスの歴史学者、E. H. カークの「歴史は過去と現在の対話である。」という言葉は広く知られておりますが、出土した土器片を手にしみますと、まるで先人の心の温もりが掌に伝わってくるかのごとく思われ、まさしく自分が過去と対話をしているように感じられます。そして先人の歴史を現在によりよく生かすためにも、本書が教育や学術の分野などで広く利用されることを切に願ってやみません。

最後に、この発掘調査にあたり深い御理解を示された土地所有者の清水徳重氏をはじめ、関係者のみなさまに厚く感謝を申し上げ、序といたします。

昭和62年3月

深谷市教育委員会

教育長 鳥塚 恵和男

例 言

1. 本書は、個人住宅の建築に伴う、埼玉県深谷市上野台字御屋敷2,334-2 所在遺跡の発掘調査報告書である。事業名は小台遺跡第3次発掘調査とした。
2. 発掘調査は、昭和61年度事業として、国及び県の補助金の交付を受け、深谷市教育委員会が主体となり実施した。現地発掘期間は昭和61年11月26日～12月19日で、調査面積は約300㎡である。
3. 本書の執筆・編集及び写真撮影は澤出晃越が行った。
4. 図版中の北は、座評化を示している。なお、報文中の遺構に関する数値は、特に断わらないかぎり、確認面においてのものである。
5. 石器の材質は、埼玉県立自然史博物館学芸員、木間岳史氏に鑑定していただいた。
6. 出土品は、深谷市教育委員会が保管している。
7. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御助言を賜った。
井上肇、小川望、小俣悟

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	烏塚忠利男
		教育次長	堀 輝雄
事務局	深谷市教育委員会社会教育課	課長	飯島光武
		課長補佐	河田記久平
		文化財保護係長	工藤友明
		主任	小林京子
調査担当者	深谷市教育委員会社会教育課	主事	澤出晃越
調査参加者	井上純子、宇賀地桂子、大原黎子、加瀬律子、加藤佳子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、佐々木由紀子、里山まり子、鈴木令子、砂田伊久子、須山俊子、滝口知子、玉瀬静枝、都築百合子、西井れい子、土師澄子、細川ケイ子、松本幸子、水野祥代、本橋玲子、森光代、渡辺哲子		

目 次

序	
例言	
目次	
I 発掘調査に至る経過	1
II 遺跡の地理的・歴史的環境	1
III 調査の概要	2
IV 遺構と出土遺物	
1. 遺 構	4
2. 出土遺物	
(1) 出土土器	4
(2) 出土石器	29
V まとめにかえて	33

写真図版

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/40,000)	第12図 第2トレンチ出土土器(3)
第2図 調査区周辺地形図 (1/5,000)	第13図 第2トレンチ出土土器(4)
第3図 調査区全測図 (1/120)	第14図 第2トレンチ出土土器(5)
第4図 土層断面図・遺物出土状態	第15図 第3トレンチ出土土器(1)
第5図 第1トレンチ出土土器(1)	第16図 第3トレンチ出土土器(2)
第6図 第1トレンチ出土土器(2)	第17図 第3トレンチ出土土器(3)
第7図 第1トレンチ出土土器(3)	第18図 第3トレンチ出土土器(4)
第8図 第1トレンチ出土土器(4)	第19図 グリッド出土・表面採集土器
第9図 第1トレンチ出土土器(5)	第20図 出土石器(1)
第10図 第2トレンチ出土土器(1)	第21図 出土石器(2)
第11図 第2トレンチ出土土器(2)	第22図 出土石器(3)



1. 上敷免北遺跡 2. 上敷免遺跡 3. 圃沼城跡 4. 伝幡羅太郎館跡 5. 片鼻和城跡
 6. 深谷城跡 7. 深谷町遺跡 8. 大沼弾正弾正忠屋敷跡 9. 桜田馬場 10. 曲田城跡
 11. 桜ヶ丘組石遺跡 12. 秋元氏館跡 13. 小台遺跡 14. 洞山遺跡 15. 割山西遺跡
 16. 苅場松原遺跡 17. 出口遺跡 18. 島之上遺跡 19. 前吊遺跡 20. 人見館跡

第1図 遺跡位置図 (1/40,000)

I 発掘調査に至る経過

埼玉県北部に位置し、利根川を挟んで群馬県と接する深谷市は、近代日本経済界の偉人、渋沢栄一の生地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正2年(1456)に上杉房憲が築いたといわれる深谷城の城下町として、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約90,000人、面積約70km²で、農業生産高は県内随一を誇り、工業団地の形成、住宅の増加など、急速に都市化が進行している。

昭和32年、深谷市大字上野台字小台地内において、耕作中に縄文土器片などが発見されたことがきっかけとなり、同年3月に深谷市教育委員会により、発掘調査が実施された(註1)。この結果、周辺は縄文時代中期後葉～後期初頭の集落跡であることが確認された。昭和53年、小台遺跡内を通る都市計画街路南大通り線が建設されることになり、同年8月に深谷市小台遺跡調査団により、発掘調査が実施された(註2)。昭和56年、深谷市遺跡詳細分布調査により、小台遺跡の遺物散布範囲は20ha以上に及ぶことが確認され、遺跡は従来考えられていたよりもさらに大規模な集落跡であることが推定された。

ところで、小台遺跡の一帯の、特に南大通り線の北側は、深谷駅から徒歩約20分の市街化区域であり、最近では住宅が増加している。昭和61年10月小台遺跡内の深谷市大字上野台字御屋敷2344番地2号に、個人の住宅が建設される計画があることが明らかになった。市教育委員会は11月10日に試掘調査を行い、掘削が激しいものの、縄文土器片などの遺物が包蔵されていることを確認した。そこで、市教育委員会は、昭和61年度文化財保存事業として発掘調査を実施することとし、準備を進めることになった。

なお、事業名は、上記の経過により小台遺跡第3次発掘調査とした。

註1 小沢国平 「深谷市小台遺跡調査報告書」 昭和32年4月 深谷市教育委員会

註2 経間真一ほか 「小台遺跡」 昭和54年3月 深谷市小台遺跡調査団

II 遺跡の地理的・歴史的環境

深谷市の地形を概観すると、市の中央部をほぼ東西に走る高崎線付近を境界として、南半を占める棚挽台地と、北半を占める妻沼低地に二分される。棚挽台地は、荒川的作用により形成された、寄居付近を扇頂として北へ広がる洪積扇状台地であり、妻沼低地は、利根川的作用により形成された沖積低地である。

棚挽台地は、西側の武蔵野面に比定される棚挽面(棚挽段丘)と、東側の立川面に比定される寄居面(御桜成ヶ原段丘)とで段丘状に形成されている。棚挽面は、ほぼ高崎線沿いの崖線で比高5～20mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は、高崎線より1.5～1.8kmほど延びており、比高2～5mをもって妻沼低地と接している。台地と低地の境界付近の標高は、棚挽面が40～50m、寄

層面が32～35m、妻沼低地が30～35mである。なお、橋後面の北東端近くに第三紀層から成る残丘、標高98mの仙元山があり、台地北端部の橋後面と寄居面の境界付近には、深谷層という活断層が確認されている。

小台遺跡は、深谷市大字上野台の東端部、高崎線深谷駅の南約1.2kmにあり、その範囲は20ha以上に及ぶと推定される、縄文時代中期後半～後期前葉の大遺跡である。橋後台地橋後面の北東端部であり、唐沢川により南北に開析された谷沿いで、標高は52～60mである。

深谷市内では、まだ旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代早期・前期の遺跡は若干数確認されている。橋後台地寄居面の末端部にある東方城跡では、昭和61年8月～9月の発掘調査で尖頭器が出土した。

縄文時代中期になると、前島遺跡、島之上遺跡、出口遺跡（註1）など、遺跡数は急増する。小台遺跡を含めこれらの遺跡は、中期後半から後期前葉にかけてのものが多く、橋後面の標高70m付近から北端部にかけての、上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川などにより南北に開析された谷筋に密集している。こうした状況は、いわゆる扇端湧水に関連するものと理解されている（註2）。

最近では深谷町遺跡（註3）など、妻沼低地内でも縄文時代中期以降の遺跡の発見例が増加している。縄文時代の遺跡の分布状況とその原因については、再検討されねばならないであろう。

註1. 横川好喜ほか「前島・島之上・出口・芝山」昭和52年 埼玉県教育委員会

註2. 柳沼幹夫「II 立地と環境」註1所収

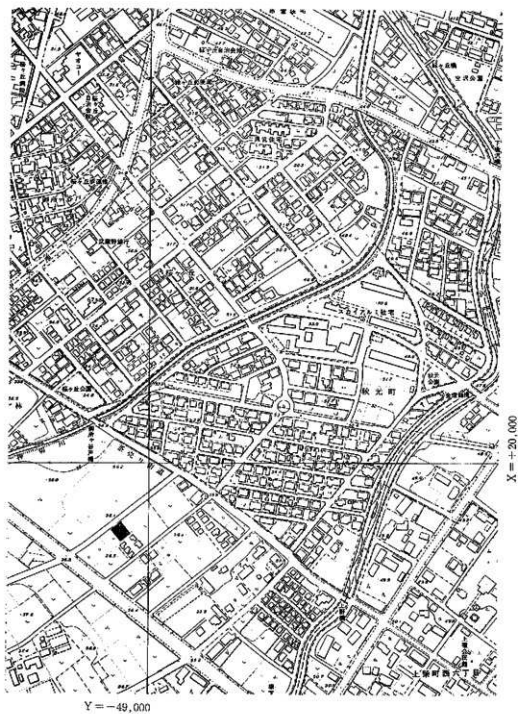
註3. 澤田晃雄ほか「深谷町遺跡」昭和60年3月 深谷市教育委員会

III 調査の概要

昭和61年11月26日、パワーショベルによる表土の除去から調査を開始した。27日に精査を行ったが、攪乱が激しく、遺構プランが確認できないため、トレンチを2条設定して掘り進めることにした。12月8日、調査区の形状に合わせて4m間隔のグリッド杭を設定した。12月9日、第1トレンチ、第2トレンチの調査により、埋没谷が確認された。埋没谷の底（深さ90～100cm）付近には遺物はほとんどなく、確認面から深さ60～70cmにかけての黒褐色土層に縄文土器片が含まれており、いわゆる遺物包含層が形成されていることが確認された。そこで、攪乱の範囲を確認し、残り部分については第3トレンチを設定するのみとした。12月16日、平板により第1、第2トレンチ平面測量を行った。12月19日、第3トレンチ平面の平板測量を行い、調査区全景写真を撮影したうえで第1、第2トレンチ間のベルトを崩し、器材を撤収して現地発掘調査を終了した。

出土遺物は、縄文土器と石器である。縄文土器は、ほとんどが小破片であり、口縁部から胴部にかけて復元したものが1個体だけあった。いわゆる勝坂式から堀之内式にかけてのものが大半を占め、わずかに猪磯式のものも含まれていた。石器は、磨製石斧、打製石斧、石鏃などである。

なお、調査区内の攪乱は、昭和40年代の区画整理事業によるものと推定される。



第2图 调查区周边地形图 (1/5,000)

IV 遺構と出土遺物

1. 遺構（第3図）

前述したように、調査区内は攪乱が激しく、トレンチを3条設定しえたのみであり、明確に人為的な遺構と確認できたのも上埴2基のみである。全面的に確認面から深さ60～70cmにかけての黒褐色土層に縄文土器片等が含まれており、いわゆる遺物包含層が形成されている。

○第1号土埴 第1トレンチの西隅に位置し、遺物包含層を切って構築されている。大半が調査区外になるものと思われ、規模等は不明であるが、平面プランは円形を呈するものと思われる。全体は楕円状を呈し、底は小ビットが2つ並んだようになっている。確認できる部分での深さは、現地表面より約160cmである。

○第2号土埴 第1トレンチから第1・第2トレンチ間のベルトに跨っており、遺物包含層を切って構築されている。平面プランは径約1.6mの円形状を呈し、深さは約115cmである。全体は楕円状を呈し、底部は丸い。壁の中位に弱い稜を有し、部分的にテラス状になっている。

○埋没谷 第1トレンチと第2トレンチを蛇行して横断している。攪乱のため形状は明確ではないが、幅は5～6mと思われ、深さは90～115cmである。壁はなだらかで、部分的に弱い稜を有している。下層の明褐色土層には遺物はほとんど含まれていないが、上層～中層の黒褐色土層に、縄文土器片、石器等が多量に含まれていた。

第3トレンチ内は、円形状のごく浅い落ち込みは認められたが、明確に土埴とは確認できなかった。全体的に土層中に遺物が包含されていた。西隅の1.0×0.8mほどの長円形状の落ち込みは土埴の可能性が高く、第18図78はこより出土したものである。東隅には幅0.7mと1.1mほどの長方形の集石状部分が認められたが、人為的な遺構であるかは不明である。

なお、第3トレンチの地山は、第1・第2トレンチがローム及び深い部分で砂であったのとは異なり、砂を含む礫層であった。調査区周辺の旧地形が、かなり起伏に富んでいたことが推定される。

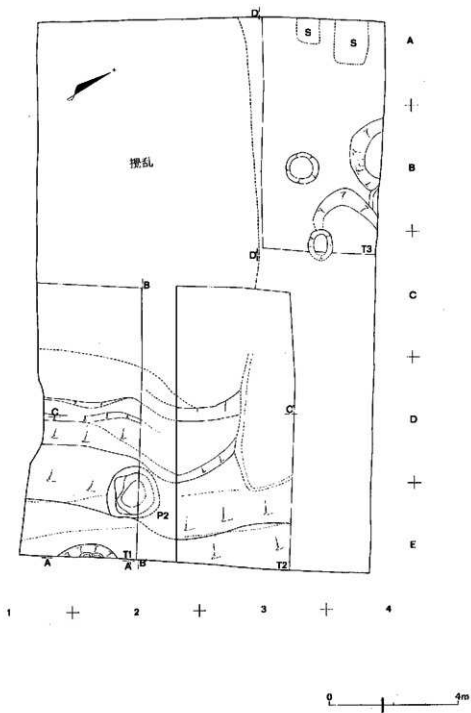
2. 出土遺物（第5図～第21図）

(1) 出土土器（第5図～第19図）

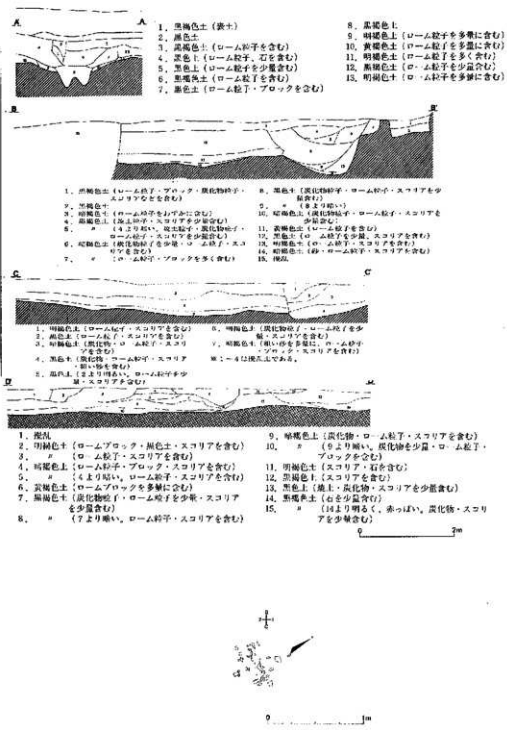
○第1トレンチ出土土器（第5図1～第9図120）

1～17は、12・13を除き、いわゆる勝坂式に属するものと考えられる。

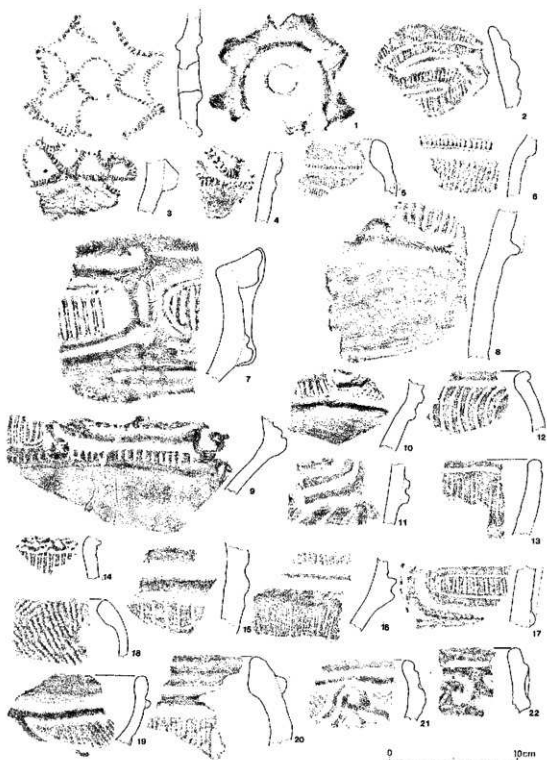
1～6は、刻み目が施された隆線により主体的な文様が描かれたものである。1は、ヒトデ状を呈する口縁部の装飾部分と思われる。径1.8～1.9cmの孔を中心に、刻み目が施された隆線により、U字状または三日月状の文様が施されている。2は波状口縁の頂部である。刻み目が施された隆線



第3图 调查区全测图 (1/160)



第4図 土層断面図(1/80)・第3トレンチ遺物出土状態(1/40)



第5圖 第1トレンチ出土土器(1)(1/3)

により、S字状に蛇行した文様が描かれている。3・4・6は頸部の破片であろう。3・4は、口縁部直下は無文帯となっている。6はLの撚糸文が施されている。

7～10は、口縁部文様帯の主に隆線による区画文様の内側に、縦沈線が充填されたものなどである。いずれも頸部は無文帯となっている。

11は頸部の破片と思われる。上位は、中央に沈線が施された幅の広い隆線により文様が構成されており、下位は斜めの沈線が充填されている。

12・13は、口唇部に沈線が回り、以下に縦沈線などが充填されたものである。

14は、竹管状工具による刺突を施した細い波状の隆線が回り、以下に縦沈線が充填されている。

15・16は、頸部に隆帯が2条回り、以下に縦沈線が充填されている。

17は口縁部の破片と思われる。刻み目が施された隆線による区画内に楕円形状の沈線が描かれ、その内部に縦沈線が充填されている。

18～93は、一部不明なものを除き、加曾利E式に属するものと考えられる。

18は、LR単節の縄文のみが施された破片である。口唇部の一部は横転されている。

19～33は、主として隆線により文様が構成された口縁部または頸部の破片である。渦巻文・区画文などが認められる。30は隆線に刻み目が施されている。20～21・23～26・28～31・33は縄文を地文としており、20のみLR単節、他はRL単節である。19・27・32はLの撚糸文を地文としており、32は左巻と思われる。28・31は波状口縁である。

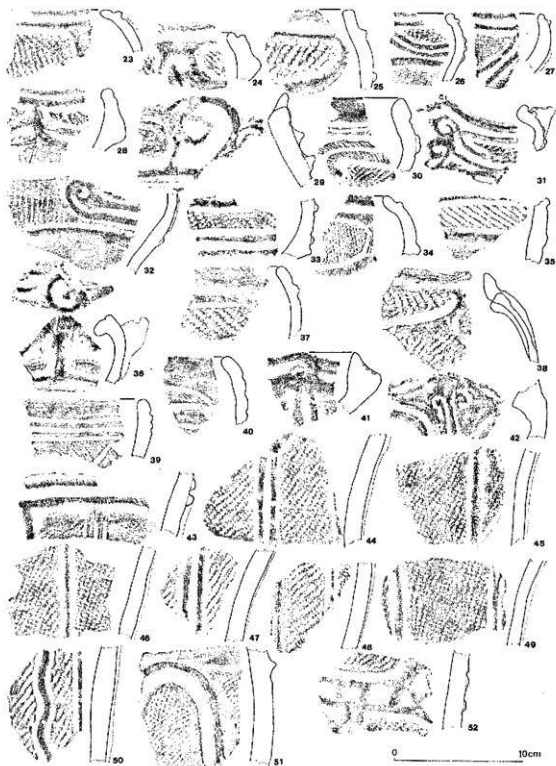
34～42は、主として沈線により文様が構成された口縁部または頸部の破片である。渦巻文・区画文・平行沈線などが認められる。36・38・41・42は波状口縁であろう。35～41は縄文を地文としており、35～38はRL単節、39はLR単節、40はL無節である。34はL右巻きと思われる撚糸文が施されている。

43～59は、胴部に主として隆線が施されたものである。43～50は縄文を地文とし、隆線が垂下したものである。43は3条の垂下する平行沈線も認められる。縄文は、43～50ともにRL単節である。51は、微隆線と磨消縄文により大きな波状の文様が描かれている。52は貼付の隆線により、梯子状の文様が施されている。53は渦巻状の文様などが施されている。縄文は51～53ともにRL単節である。54～59は撚糸文を地文としたものである。54は底部であり、推定底径は9cm弱である。54・56～59の撚糸文はL左巻きと思われる。

60～72は、胴部に主として沈線が施されたものである。60～70は縄文を地文とし、平行沈線が垂下したものの、渦巻状の文様が描かれたものなどである。70は磨消縄文が施されており、称名寺式の可能性もある。69のみ口縁部から頸部にかけての破片である。縄文は、61・63・67・70はLR単節、他はRL単節である。71は底部であり、推定底径9cmである。垂下する3条の平行沈線間に矢羽状の沈線が充填されたものと思われる。72はL右巻きと思われる撚糸文を地文としている。

73は、L左巻きと思われる細かく深い撚糸文のみが施された胴部破片である。74はLR単節の細かい縄文のみが施された底部破片である。底面はナデられており、内面には炭化物が付着している。

75～79は、頸部に横位の矢羽状の交互刺突文が施されるものなどである。胴部は隆線による区画内に新沈線が充填されている。



第6図 第1トレンチ出土土器(2) (1/3)

80は、垂下する隆線間に、比較的粗に矢羽状沈線が充填されたものであろう。

82は、口縁部は無文で、頸部屈曲部にハ字状の交互刺突文が施され、以下に円または渦巻状の集合沈線文が描かれたものと思われる。

83は頸部に横位の矢羽状の交互刺突文が施されたものとも思われる。横位に隆帯が巡り、それ以下はほぼ同間隔で沈線が垂下している。

84～89は、いわゆる条線文土器である。84は口縁部に沈線と隆線が巡っている。85は口唇部に平行沈線が巡っている。86は、貼付による横位の平行隆線が巡っている。87は斜めに条線文が施されている。88・89は条線文のみのものである。

90は、無文の浅鉢の口縁部であらう。外面の一部に炭化物が付着している。91も無文の口縁部であるが、孔が2つ並んで通っている。92は無文の底部である。推定底径10cm強。底面は粗くナテられており、内面の調整は粗い。93はいわゆる有孔罅付土器の破片である。

94～119は、称名寺式、堀之内式に属するものである。

94～96は、平行沈線と磨消し縄文により、丁字文などが描かれたものであろう。縄文は94はL無節、95・96はL R単節である。96は外面に炭化物が付着している。

97は、細く深い連続刺突が施された隆帯と沈線の間に縄文L R単節が横転されている。

98は、口唇部に巡る平行沈線間に、細長い列点が施されている。

99・100は、間に列点が施された平行沈線により、丁字文などが描かれたものであろう。

101～103は沈線のみにより文様が描かれたものである。101は、横位に巡る沈線以下に、格子状の細い沈線が施されている。103は、平行沈線により丁字状の文様などが描かれたものであろう。

104は、刻み目が施された隆線の下位、平行沈線が垂下している。

105は波状口縁である。頂部から螺旋状の隆線が垂下し、口縁に沿った沈線の下には竹管状工具による刺突が並んでいる。

106は底部に近い破片と思われる。沈線と竹管状工具による刺突が施されている。

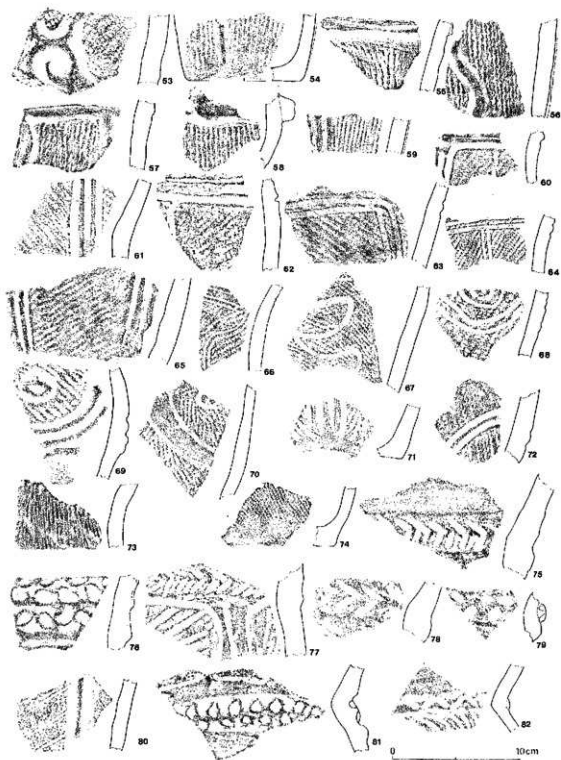
107は、地文は条線文で、平行沈線間に竹管状工具による列点が施されている。

108は、口縁頂部の突出部である。中央に径3.5cmほどの孔が通り、その上下に刺突が施され、孔の周囲を2重の沈線が巡っている。内面は段状となっており、突出部分は内側へ彎曲し、平坦な上面は半円形を呈する。

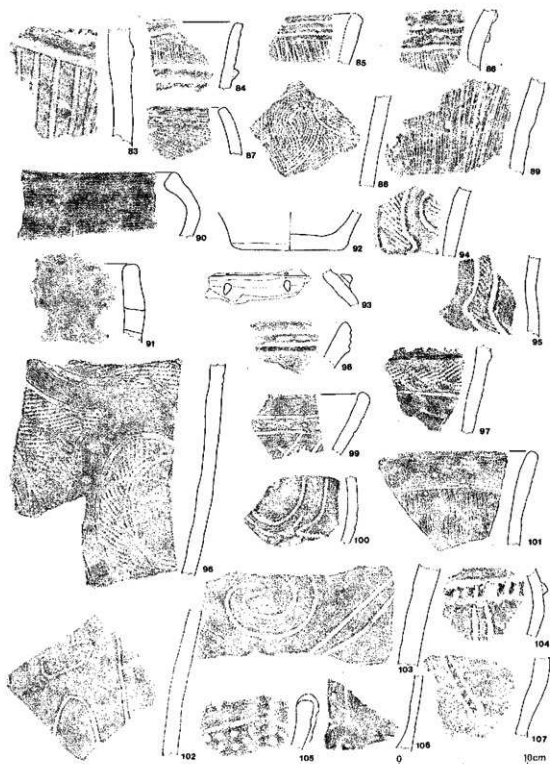
109は、波状口縁頂部の装飾部分である。孔は3ヶ所通っている。内面に、竹管状工具による刺突と深い沈線が施されている。

110～113も波状口縁の頂部であらう。110は、頂部上面が斜めに渦巻状となっており、外面は、中央に沈線が巡る隆線が、刺突を中心に貼り付けられている。111は、孔を中心に沈線が巡っている。112は、孔、刺突、沈線により文様が構成されており、下位は3足状になっている。113は、頂部から6字状の隆線文が施されている。

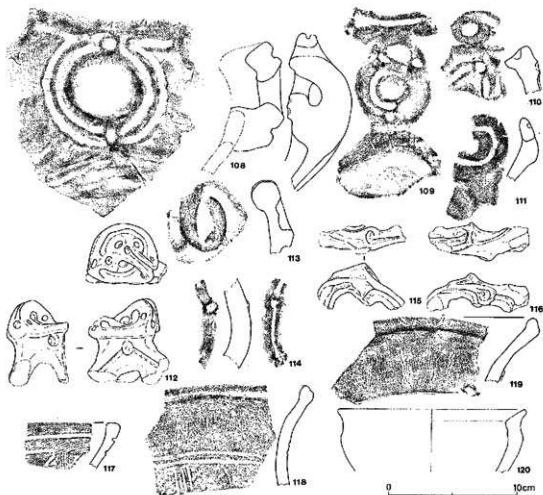
114～116は、紐状の装飾部分である。114は、両側面に対応するように刺突が施され、片側に沈線が施されている。115・116は同一個体であらう。沈線と隆線により細かい渦巻文などが施されている。



第7図 第1トレンチ出土土器(3) (1/3)



第8図 第1トレンチ出土土器(4) (1/3)



第9図 第1トレンチ出土土器(5) (1/3)

117～119は口縁部破片である。117は、沈線と磨消縄文により幾何学的文様が描かれたものであろう。縄文はL R単節である。118は、外反する口縁部は無文で、内曲する口唇部外面に沈線が巡っている。胴部はR L単節の縄文を地文として沈線が施されている。119は外反する無文の口縁部で、口唇部は内曲している。頸部を巡る沈線と、8字状貼付の一部が認められる。

120は時期不明の碗形の土器である。推定口径15.0cm。口縁部は屈曲して外傾し、体部は丸い。口縁部は横ナデ、内面は横方向のナデ、体部外面は横方向の削りである。

○第2トレンチ出土土器(第10図1～第14図136)

1～3は諸塚式に属するものである。1・2は縄文R L単節を地文とし、半截竹管による連続爪形文が施されている。3も半截竹管による連続爪形文が施されている。

4～31は、勝坂式または加曾利E式の初頭に属するものであろう。

4～11は、刻み目が施された隆線により主体的な文様が描かれたものである。5は頸部が無文帯

となるものであろう。8は、刻み目が施された隆線による区画内に、さらに間に刻み目が施された平行沈線が施されている。9は、刻み目を施した隆線により口縁部と胴部が区画されているものと思われる。口縁部は縦沈線が充塞され、胴部にはR L単節の縄文が横転されている。

12は、口縁部に付された把手状の装飾部分であろう。両側面とも中央を通る平行沈線の両脇に刻み目が施されている。

13~19は、口縁部の主として隆線による区画文様の内側に縦沈線が充塞されたものである。13は隆線に刻み目が施されている。17は波状口縁であろう。18は頸部が無文帯となっている。19は、2段に貼り付けられた2重の隆線が、おそらく頸部に巡っている。

20~24は、平行沈線と上下交互の連続衝突により、小さい波状隆線状の文様を施したものである。20の地文はLの摺糸文、21・22は縄文R L単節を地文として沈線による文様が描かれている。

25は、頸部に隆線、沈線、刻み目により精緻な文様が施されたものである。26は、矢羽状の刻み目が施された隆線が垂下し、縦沈線の間の一部にも矢羽状の刻み目が施されている。27は、間に刻み目が施された平行沈線が巡り、口唇部上面は平坦である。

28~31は、口縁部に沈線により密な渦巻文などが描かれたものであろう。28は、頸部に八字状の交互衝突文が施された隆線が巡っている。29は渦巻文の脇の斜めの平行沈線間に刻み目が施されている。30・31は渦巻文の直下に刻み目が施された隆線が巡っており、以下は無文である。

32~110は、加曾利F式に属するものと考えられる。

32~56は、主として隆線により文様が描かれたものである。32~50は縄文を地文としている。32~44は口縁部及び頸部の破片であり、渦巻文、区画文などが描かれている。34は口縁部の一部が突出しており、38・41は波状口縁である。39は橋状の把手が付されている。43は頸部に波状の隆線が巡っている。42・44は頸部が無文帯となっている。45~50は隆線または微隆線が垂下している。縄文は32がL無節、33・36・38~42・44~49がR L単節、35・43・50がL R単節である。51~55は摺糸文を地文としている。51は、口唇部の一部が外側へ突出し、その下に渦巻文に始まる隆線が垂下している。52は口縁部の破片であり、貼付の隆線により渦巻文などが描かれている。53~55は隆線が垂下したものである。51~55とともにLの摺糸文である。56は、隆線による文様内に沈線が充塞されている。

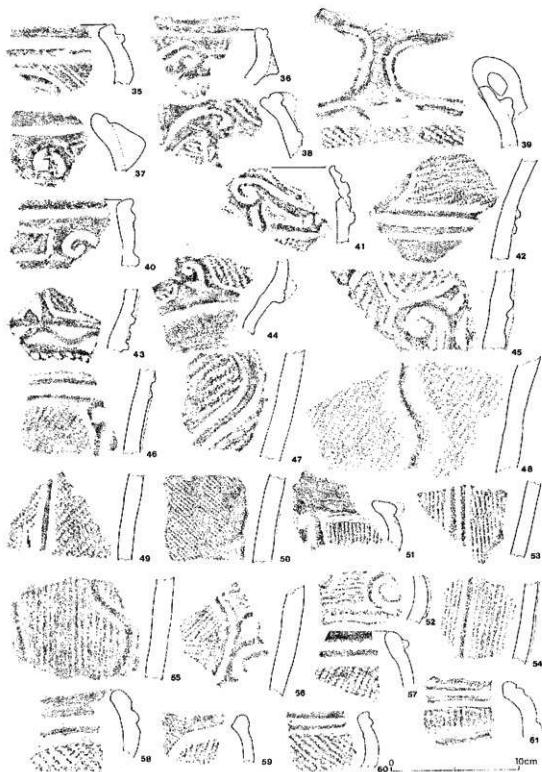
57~74は、主として沈線により文様が描かれた口縁部または頸部の破片である。57~72は縄文、摺糸文などを地文としており、区画文、渦巻文、波状文、平行沈線などが描かれている。65は波状口縁の頂部であり、上面に渦巻文が施されている。66・68・70・71は、口唇部に竹管状工具などによる列点が巡っている。72は外側に突出した部分に刻み目が施されている。57~60・63・64・66~68・70・72の縄文はR L単節、61の摺糸文はLである。73・74は、沈線のみにより波状文などが描かれたものである。

75~79は、おそらく頸部に、矢羽状または八字状の交互衝突文が施されたものである。77は、胴部の沈線区画内に縦沈線が充塞されている。79は隆線間に八字状の交互衝突を施すことにより、細い波状隆線のような効果を生み出している。

80~84は、垂化する隆線または沈線の間に矢羽状の沈線が施されたものである。81は隆線の一部



第10図 第2トレンチ出土土器(1) (1/3)



第11図 第2トレンチ出土土器(2) (1/3)

が剥離している。

85-101は、主として沈線により文様が描かれた胴部の破片である。85-98は縄文を地文としている。85-90は、渦巻文、平行沈線などが施されている。85は称名寺式の可能性がある。91-97は沈線が垂下したものである。92・93・95-97は、平行沈線間の縄文が磨り消されている。97は底部に近い破片であり、内面に炭化物が付着している。縄文は、85・86・94・96がL R単節、87-93・95・97・98がR L単節である。99・100は捺糸文を地文としている。98はLの捺糸文を地文とし、波状または平行沈線を密に巡らせている。100はRの捺糸文を地文とし、沈線及び隆線が垂下している。頸部には沈線及び隆線が巡っている。101はいわゆる逆弧文土器であろう。地文は条線文である。

102・103は無文の口縁部である。ともに浅鉢と思われ、内面はよく研磨されている。102は口唇部が若干外側へ肥厚している。103は口縁部は屈曲して丸みをもった体部へ移行する。

104-106は無文の底部である。104は推定底径4.5cm強。底面はナデられており、内面の調整は粗い。105は底径6.6cm。底部直上でわずかにすばまってから広がる形態を呈するものと思われる。底面はナデられており、内面の調整は粗い。106は推定底径12cm。かなり広がる器形を呈し、浅鉢の可能性が高い。内面は丁寧に調整されているが、底面はほとんど無調整である。

107・108は前耳壺の破片であろう。107は微隆線により文様が描かれており、縄文が施されているようであるが、器面の摩滅のためにはっきりしない。108は直立する無文も口縁部である。補修孔が内外面より穿たてている。109は浅鉢の口縁部であろう。口縁は若干波状を呈するようである。中央に沈線が通る隆線と刺突により文様が描かれている。称名寺とみるべきかもしれない。110はいわゆる有孔罌付土器である。

111-136は、一部不明なものを除き、称名寺式または堀之内式に属するものであろう。

113-116は、平行沈線と磨消縄文により文様が描かれたものである。113は鈎状文が認められる。縄文はいずれも細かく、113のみR L単節、他はL R単節である。

117-121・126は、間に列点が施された平行沈線により、丁字文などが描かれたものであろう。いずれも内面はよく研磨されている。

122・123は沈線のみにより文様が描かれたものである。122は外面に炭化物が付着している。

124は波状口縁の頂部である。口縁部は内面している。外面には沈線による文様が描かれ、頂部内面には刺突と沈線が施されている。

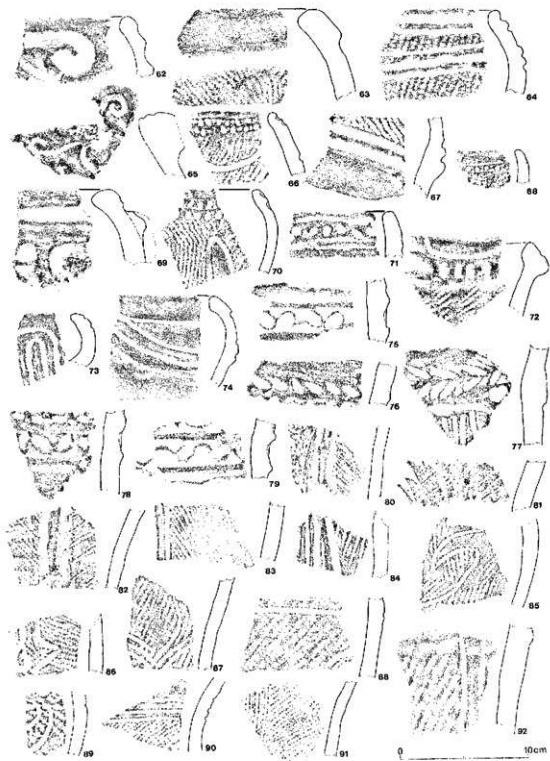
125も波状口縁の頂部であろう。中央に孔が通り、孔の周縁には刺突と沈線が施され、全体は螺旋状となっている。

127は波状口縁の一部である。口唇部外面には列点と沈線が巡り、内面には波状の裾部の刺突より深い沈線が巡っている。

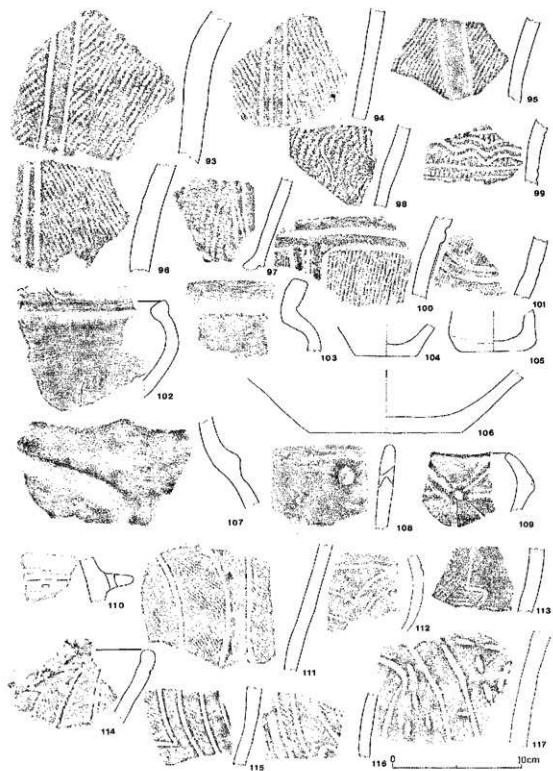
128は口縁部に付けられた小型の橋状把手である。背面、両側面とも刺突と沈線が施されている。

129は、横位に巡る平行沈線以下に縦沈線が施されている。口唇部は外側に粘土紐を貼り付け、平坦にした上面に沈線が巡っている。

130は、耳付の小型壺形を呈するか、または注口土器と思われる。耳の外面には沈線が、体部の



第12図 第2トレンチ出土土器(3) (1/3)



第13図 第2トレンチ出土土器(4) (1/3)

外面には竹管状工具による刺突が施されている。

131は波状口縁の頂部である。上面に渦巻文が描かれ、縁辺は列点と刻み目を施した隆線と沈線が施され、以下には渦巻文などが沈線で描かれている。地文は縄文のようであるが、器面の摩滅のためはっきりしない。

132は浅鉢状の形態を呈するものであろうか。口縁部と体部は沈線により区画されている。口縁部は山状の部分が並び、孔が通っている。孔の片側にU字状の刺突と沈線が施されている。

133は、頸部に巡る平行沈線上に8字状の貼付が施されている。

134は注口土器の把手部分の破片である。把手の上面には孔が通り、把手の直下に注口部分がある。体部の文様は微隆線で描かれている。

135は、胴部に斜沈線が施されている。内外面とも一部に炭化物が付着している。

136は浅鉢の屈曲部と思われる。屈曲部には刻み目が施され、その上位には集合沈線による渦巻状の文様と竹管状工具による刺突が施され、下位は無文である。

○第3トレンチ出土土器（第15図～第19図78）

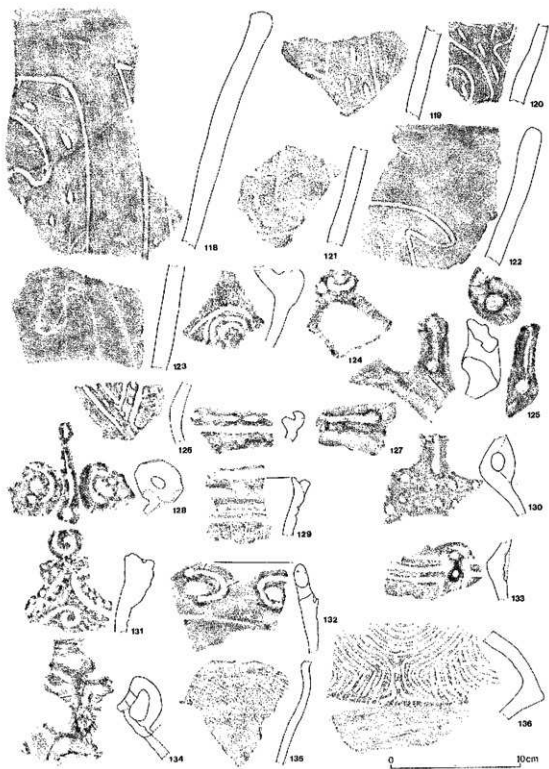
1～5は、懸坂式または加曾利Ⅱ式初頭に属すると思われるものである。

1・2は、主として刻み目が施された隆線により主体的な文様が描かれたものである。1は、刻み目が施された区画内に半截竹管による細い沈線文が描かれている。2は、矢羽状の刻み目が施された隆線による区画内に沈線が充填されている。3は、口縁部の隆線による区画内に縦沈線が充填されている。4は、頸部に巡る隆線の上位には斜めの沈線が充填され、下位には髭状工具（7条1組）による条線が施されている。5は五領ケ台式の可能性がある。

5～12は、加曾利Ⅱ式に属すると考えられるものである。

5～21は、主として隆線により文様が描かれたものである。5～12は口縁部の破片である。隆線による区画文、波状文、横S字状文や、沈線による渦巻文などが認められる。8・12は波状口縁である。6～9は縄文を地文としている。縄文は、6がL R単節、7・9がR L単節である。10・11はLの燃糸文を地文としている。12は区画内に斜めの沈線が充填されている。なお、20の口縁部は沈線か縄文がはっきりしない。13～19・21は、胴部の破片である。13～16は縄文を地文としている。14は3条の隆線により渦巻文が描かれている。15は微隆線による文様。16は隆線が垂下している。15・16とも隆線間は磨滅されている。17・18はLの燃糸文を地文としている。21は、隆線間に矢羽状の沈線が充填されている。

21～45は、主として沈線により文様が描かれたものである。22～30は口縁部の破片である。区画文、渦巻文、平行沈線などが描かれている。22・25・28は波状口縁。26は半截竹管による文様。27は口唇部に列点が施されている。23～30は縄文を地文としており、23～25・27・29・30はR L単節、26・28はL R単節である。31は沈線のみによる文様。32～38は胴部の破片である。頸部に巡る平行沈線、渦巻文、垂下する沈線などが認められる。32～34・36・37はR L単節の縄文を、38は燃糸文を地文としている。39・41・43は、口縁部の区画内に縦沈線が充填されている。41は頸部以下はLの燃糸文、43は頸部が無文帯となっている。40は横位に巡る隆線の下位に沈線が充填されている。



第14図 第2トレンチ出土土器(5) (1/3)



第15図 第3トレンチ出土土器(1) (1/3)

42は垂下する隆線間に矢羽状の沈線が充填されている。44は、沈線による区画内に沈線が方法を違えて充填されている。45は刺突、矢羽状の刻み目などで文様が描かれている。

46・47は、頸部に横位の矢羽状交互刺突文が施されたものと思われる。

48は燃糸文のみのものである。燃糸はL左巻きと思われる。49は条線文のみのものである。50は浅鉢の屈曲部であろう。刻み目と隆線が施されている。51・52は底部である。51は推定底径7.5cm弱。外面はL右巻きの燃糸文が施されており、内面の一部に炭化物付着。底面は粗くナデられている。52は底径7.5cm。底面はよくナデられている。

53～78は、一部不明なものを除き、称名寺式または堀之内式と考えられるものである。

53・54は、平行沈線と磨消縄文により文様が構成されたものである。いずれも縄文は細かいLR単節である。54の底部は、底径4.9cm、器面は摩滅が激しく、縄文はあまりはっきりしない。

55～57は、間に列点が施された平行沈線などにより、文様が描かれたものである。55は外面に炭化物が付着している。56は、鈎状文の一部と思われる。

58～62は、沈線のみにより文様が描かれたものである。58は波状口縁である。頂部に孔が通り、内曲した口唇部外面には刺突と沈線が施されている。胴部外面には平行沈線による文様が描かれている。59・60は波状口縁の一部であろう。いずれも内曲した口縁部である。60は、口縁部に沿って刺突間を結ぶ沈線が施されている。61はおそらく3条1組の沈線が垂下したものでであろう。62は、横位に巡る沈線の下位に、縦の沈線が充填されている。

63～65は波状口縁の頂部である。63は、縁辺に渦巻文を伴った2重の沈線が施され、中央に孔が通っている。64・65は橋状把手状となったものである。いずれも口唇部は内曲し、頂部の内面は、中央に孔を配し、周縁に刺突及び沈線を施している。65は側面にも刺突と沈線が施され、上位にも孔が通っている。

66は、橋状把手状の部分が付けられていたようである。胴部は隆線と沈線により渦巻状の文様が描かれていたものと思われる。

67は、胸部に浅い縦の沈線が充填されている。

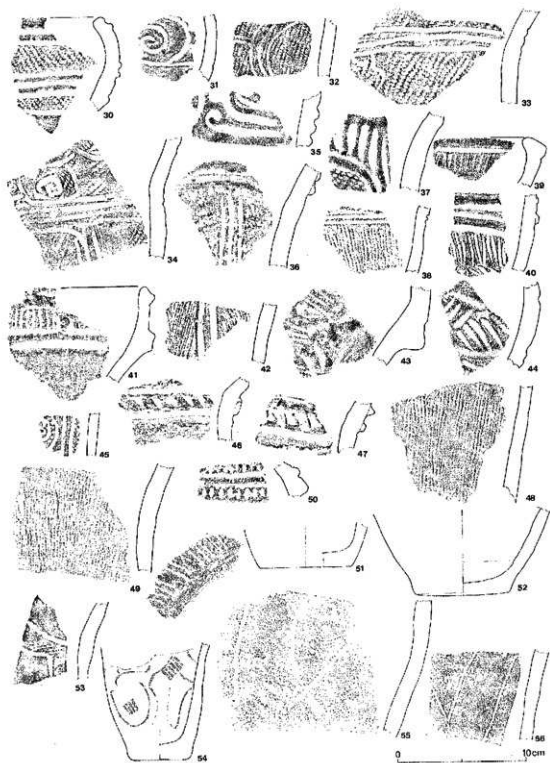
68～71は、刻み目または刺突が施された隆線が垂下したものである。68は口唇部にも刻み目が施されており、地文はLR単節の縄文である。69は、平行沈線と磨消縄文による文様が描かれているが、摩滅のために縄文ははっきりしない。70は平行沈線による文様が描かれている。71の地文は縄文であるが、摩滅のためにはっきりしない。

72は、頸部を巡る平行沈線の上に、刺突が施された隆線やボタン状の貼付が施されている。地文は細かい縄文であるが、撚りははっきりしない。

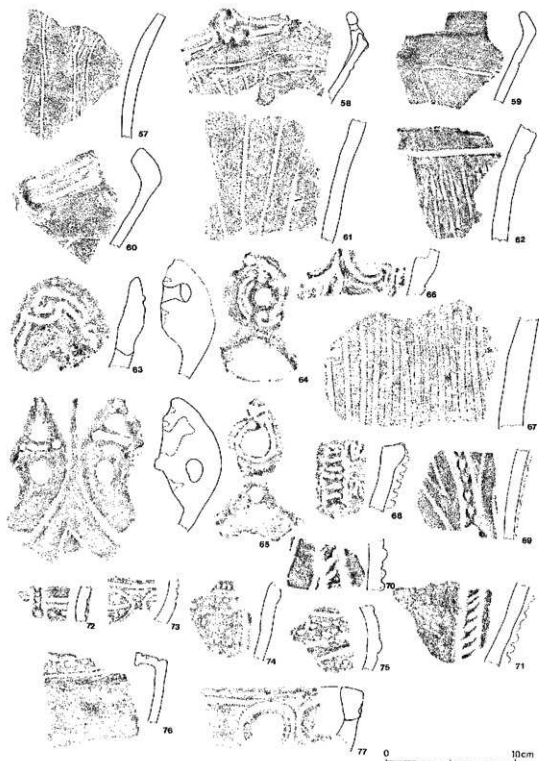
73～75は、沈線による文様間に刺突が充填されたものである。74は刻み目が施された隆線が巡っている。

76は、口縁部がほぼ直角に内曲し、その上面に、間に2列の列点を描いた平行沈線が施されている。体部外面は無文で、一部に炭化物が付着している。

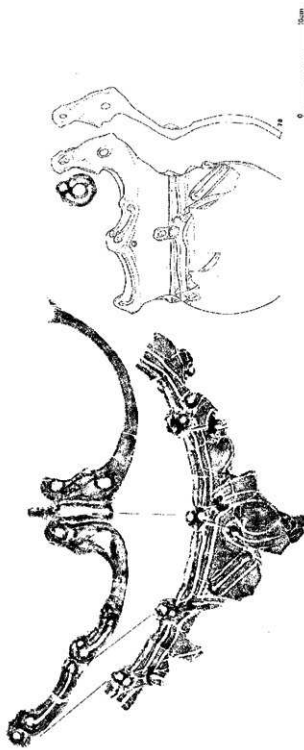
77は、口径は小さいものと推定される。比較的大きい孔が2つ兼んで通っており、平坦な口唇部直下と孔の周間に沈線が巡っている。器台の可能性もあろう。



第16図 第3トレンチ出土: 土器(2) (1/3)



第17図 第3トレンチ出土土器(3) (1/3)



第18図 第3トレンチ出土土器(4) (1/4)

78は、出土土器の中で唯一口縁部から胴部まで復元しえたもので、口縁部から頸部までは全周している。胴部最大径16.5cm、残存高24.5cm。65のような橋状把手状の頂部が1つ付けられている。この頂部は、断面に孔が2つ通っており、内面は盲孔とその周囲に刺突と沈線が施されている。口縁部は内曲しており、実測図の正面は波状口縁、背面は平縁となっている。実測図中央の波状頂部直下には小さい孔が通っている。頸部には平行沈線が巡り、8字状貼付文が4単位で施されている。胴部は、両端がボタン状に隆起したC字状と逆C字状を組み合わせた文様が8字状貼付文に対応して4単位で描かれ、その間をやはり両端がボタン状に隆起した斜めの沈線でつないでいる。拓影図中の直線は口縁部の文様と頸部以下の文様の対応関係を示したものである。橋状把手状の頂部や、口縁部波状部分外面（平縁部分外面は無文）、胴部の両端がボタン状に隆起した文様など、この土器の文様は、2つの刺突を結ぶ沈線を主要要素として構成されている。なおこの土器は、第3トレンチ西隅の土壇状の部分より出土したものである。

○グリッド出土及び表面採集土器

(第19図1～23)

1は、横位に矢羽状の交互刺突文が巡り、沈線による区画内に縦沈線が充填されている。

2は、6つの刺突が施され、深い沈線が渦巻状に施されている。

3～15は、一部不明なものを除き、



第19図 グリッド出土・表面採集土器 (1/3)

加曾利E式に属するものと考えられる。

3～6は口縁部の破片である。3は隆線と沈線を組み合わせて渦巻文などを描いている。4は微隆線により文様が描かれている。縄文はL R単節で、微隆線の間は磨消されている。5は隆線により区画文ないし横S字状文が描かれている。区画内はR L単節の縄文である。6は口縁部にL R単節の縄文を地文として細い沈線と隆線が巡っている。頭部は無文である。

7は横位に巡る隆線以下にR L単節の縄文が施されている。8は隆線が平行して垂下しているが、一部剥離している。地文はR L単節の縄文。

9はLの捻糸文を地文とした口縁部の破片である。隆線により文様が描かれているが、隆線の一部は剥離している。

10は条線文を地文とした胴部の破片。隆線による文様が施されている。

11は横位の2列以上の刺突文の下位に浅い沈線が施されている。

12は平行隆線による文様内に沈線が充填されている。

13は隆線と沈線による文様内に浅い刺突が充填されている。

14は台付土器の脚部である。推定底径6.5cm強。文様は正背面で対称的になっている。隆線と沈線による逆放物線状の文様の内側に孔が通っている。胴部にはLの捻糸文が施されていたようである。

15は浅鉢の屈曲部と思われる。屈曲部の隆線に刻み目が施され、口縁部にはR L単節の縄文が施されている。

16も浅鉢の屈曲部であろう。屈曲部に刻み目を施し、口縁部には縦沈線の充填などが行われているようである。

17～23は、称名守式または堀之内式と考えられるものである。

17～19は、間に列点が施された平行沈線によるJ字状などが描かれたものであろう。

20は、R L単節の縄文を地文とし、沈線による文様が描かれている。連続する獸手状の文様などが認められる。

21は口縁部の橋状把手である。波状口縁の頂部をなすものと思われる。把手の外側は沈線による文様が描かれ、把手の下部にも孔が通っている。

22も口縁部の橋状把手であり、波状口縁の頂部をなすものと思われる。外側には刺突と沈線が施され、内側にも孔が通っている。

23は浅鉢が注口土器の屈曲部であろう。屈曲部の上位に沈線による簡単な文様が描かれている。

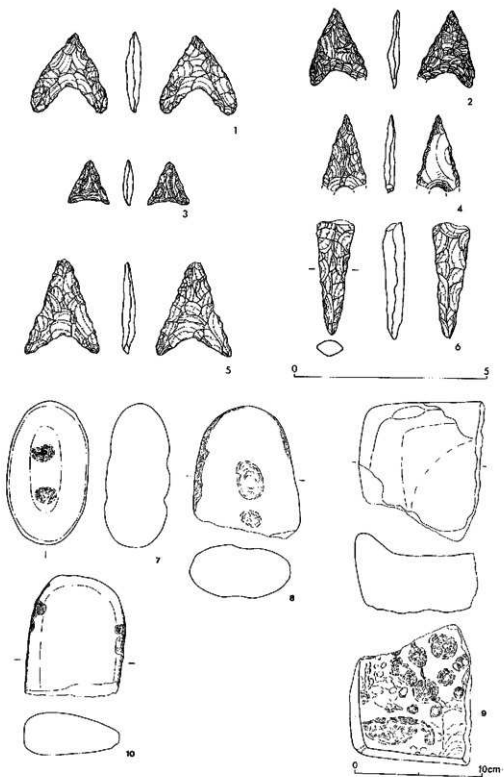
(2) 出土石器 (第20図・第21図)

○第1トレンチ出土石器 (第20図1~4、第21図11~17)

1. 凹基無茎の石鏃である。長さ2.1cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ1.0g。基部の抉入は深く彎曲しており、逆刺 先端はやや丸い。石質は黒色チャートである。
2. 凹基無茎の石鏃である。長さ2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重さ0.5g。調整はごく細かく、片方の逆刺先端部を欠損している。石質は黒曜石である。
3. 平基無茎の小型の石鏃である。長さ1.1cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.2g。正三角形を呈し、基部はわずかに内曲している。石質は灰色チャートである。
4. 凹基無茎の石鏃である。逆刺を欠損している。残存部分の、長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ0.45g。逆刺はやや長かったものと思われる。図の背面は一回の剝離の後、周縁に細かい調整を加えている。石質は灰色チャートである。
11. 打製石斧である。長さ10.1cm、刃幅6.6cm、厚さ2.2cm、重さ112.4g。楕形を呈する。図の背面の一部(頭部に近い最も厚部分及び刃部)に原礫面が残されている。石質はホルンフェルスである。
12. 打製石斧である。長さ11.3cm、刃幅5.1cm、厚さ1.6cm、重さ92.3g。刃部は使用痕が認められ、やや丸くなっている。石質は砂質頁岩である。
13. 打製石斧である。長さ9.9cm、刃幅5.0cm、厚さ2.3cm、重さ74.7g。刃部、側面など周縁が細かく調整されている。図の背面は、1回の剝離の後、周縁に細かい調整が加えられている。石質は細粒の凝灰岩である。
14. 打製石斧である。長さ9.6cm、刃幅4.5cm、厚さ1.7cm、重さ97.1g。図の背面中央部に原礫面が残されている。石質はホルンフェルスである。
15. 打製石斧である。長さ10.4cm、刃幅5.0cm、厚さ1.7cm、重さ85.5g。頭部の右側を欠損している。図の背面は、1回の剝離の後、周縁に調整を加えている。石質は安山岩である。
16. 打製石斧である。長さ8.6cm、刃幅4.4cm、厚さ1.9cm、重さ77.4g。図の背面は、1回の剝離の後、周縁に調整が加えられている。石質は砂岩である。
17. 楕形の石匙であろう。つまみの部分が欠損しているものと思われる。残存部分の長さ8.3cm、幅4.1cm、厚さ1.6cm、重さ5.0g。側面から見ると彎曲した形態を呈している。周縁の調整は正背面ともかなり細かい。石質は安山岩である。

○第2トレンチ出土石器 (第20図、第21図18~20)

7. 磨石である。長さ11.5cm、幅5.4cm、厚さ5.0cm、重さ529g。長円形の自然石が用いられている。図の正背面とも、2つの長円形の凹みが並んでいる。石質は角閃石安山岩である。
18. 磨製石斧である。刃部を欠損している。残存部分の、長さ8.2cm、幅3.7cm、厚さ1.7cm、重さ83.7g。表面は丁寧に磨かれており、側面及び頭部は平坦に面取りがなされ、横断面は長方形を呈する。石質は角閃岩である。

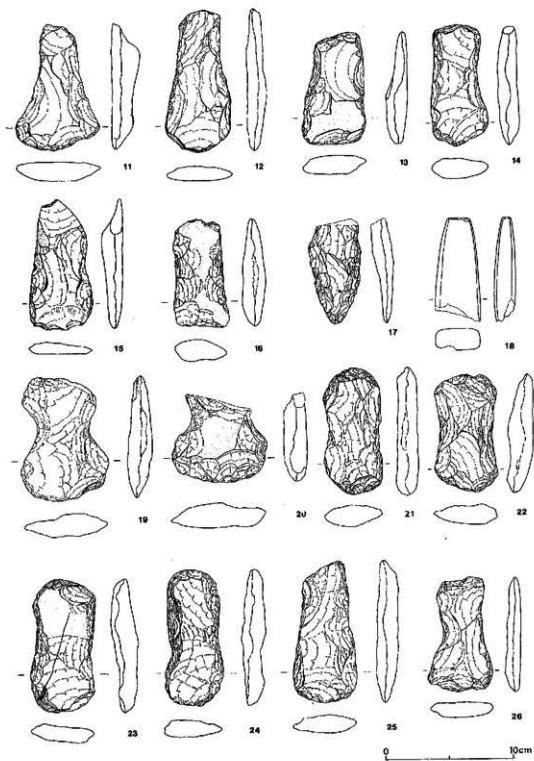


第20图 出土石器(1) (1/1·1/3)

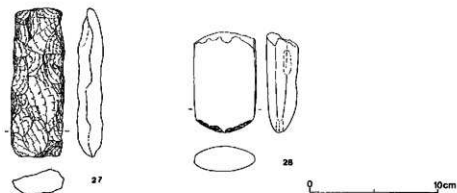
19. 打製石斧である。頭部の一部を欠損している。長さ9.9cm、刃幅6.8cm、厚さ1.9cm、重さ122.0g。分銅形を呈する。図の背面は凸面となっている。表面は風化が激しく、剥離の状況はやや不明瞭である。石質はホルンフェルスである。
20. 打製石斧である。約3分の1を欠損している。残存部分の長さ7.1cm、刃幅7.5cm、厚さ1.9cm、重さ119.1g。分銅形を呈する。図の正背面とも（特に背面は2分の1以上）に原礫面が残されており、かなり平たい自然石が用いられたものと思われる。石質は安山岩である。

○第3トレンチ出土石器（第20図5・6・8・9、第21図21～26、第22図27）

5. 凹基無茎の石鏃である。先端部をわずかに欠損している。長さ2.5cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ0.9g。石質は頁岩である。
6. 石鏃であろう。長さ3.0cm、幅1.0cm、厚さ0.45cm、重さ1.3g。全体はかなり磨耗しており、頭部は欠損しているのかははっきりしない。剥離の状況もやや不明瞭である。石質はホルンフェルスである。
8. 磨石である。2分の1弱を欠損しているものと思われる。残存部分の、長さ10.3cm、幅8.5cm、厚さ4.0cm、重さ592g。上下面ともよく使用されており、浅い凹みが施されている。側面は敲打により調整されている。石質は輝石安山岩である。
9. 石皿である。残存部分の、長さ11.1cm、幅9.7cm、高さ6.2cm、重さ596g。方形を呈するものと思われる。周縁部から内面底へはなめらかに移行し、内面底は皿状を呈する。底面は蜂の巣状になっている。石質はスコリア質の輝石安山岩である。
21. 打製石斧である。長さ10.1cm、刃幅4.6cm、厚さ1.8cm、重さ108.9g。両側辺はわずかに内曲しており、両端の刃部は細かく調整されている。図の背面にはなめらかな原礫面が残されている。石質は細粒の凝灰岩である。
22. 打製石斧である。長さ9.4cm、刃幅5.0cm、厚さ2.1cm、重さ105.7g。両側辺はわずかに内曲している。図の背面は大半が原礫面で、周縁が調整されている。石質は砂岩である。
23. 打製石斧である。長さ10.6cm、刃幅5.0cm、厚さ2.1cm、重さ120.7g。両側辺はごくわずかに内曲している。図の下端刃部背面にも原礫面が残されており、かなり平たい自然石が用いられたものと思われる。石質は千枚岩質の砂岩である。
24. 打製石斧である。長さ10.8cm、刃幅4.6cm、厚さ1.9cm、重さ111.6g。向って左側辺は特に細かく調整されている。図の背面の調整は比較的粗く、下端刃部背面には自然面が残されている。石質は頁岩である。
25. 打製石斧である。長さ11.3cm、刃幅5.0cm、厚さ1.8cm、重さ117.8g。表面は風化によりやや磨耗している。石質はホルンフェルスである。
26. 打製石斧である。長さ9.1cm、刃幅5.1cm、厚さ1.2cm、重さ61.8g。図の背面はほとんどが自然面、周縁に細かい調整が加えられている。石質は砂岩である。
27. 打製石斧である。長さ11.9cm、刃幅4.0cm、厚さ2.0cm、重さ130.7g。短筒形を呈する。図の背面上部にわずかに原礫面が残されている。周縁部の調整は比較的細かいが、刃部は厚く、表面



第21图 出土石器(2) (1/3)



第22図 出土石器(3) (1/3)

は比較的凹凸が激しい。石質は粗粒砂岩である。

○グリッド出土及び表面採集石器 (第20図10、第22図28)

10. 磨石である。3分の1～2分の1程度を欠損しているものと思われる。残存部分の、長さ9.6cm、幅7.7cm、厚さ3.4cm、重さ389.5g。上下面ともよく使用されており、側面は敲打により平坦に調整されている。加熱を受け、赤変している。石質は細粒砂岩である。

28. 磨製石斧である。頭部を欠損している。残存部分の長さ8.0cm、刃幅4.9cm、厚さ2.5cm、重さ172.6g。表面は丁寧に磨かれており、刃の背面が彎曲している。側面は比較的細い面取りがなされており、横断面は長円形状を呈する。刃部は正背面とも細かい調整剥離が施されている。

石質は玄武岩質の粗粒凝灰岩である。

V まとめにかえて

調査区は、おそらく昭和40年代の区画整理の際にかなりの攪乱を受けており、トレンチ3条のみの発掘調査となった。幅5mほどの小規模な埋没谷とその上層に遺物包含層を確認しえたが、明確に人為的遺構と確認できたものはほとんどなかった。第19図78が出土した第3トレンチの東隅は土壇の可能性はあるが、はっきりとは確認できなかった。ナンバーを付した2基の上壇は、いずれも遺物包含層形成以後のものである。

調査区内は、確認面から深さ60~70cmほどの黒色土層及び黒褐色土層が、縄文時代中期~後期の遺物包含層となっていた。この包含層は埋没谷を中心に形成されていたものと思われる。出土した土器片は勝坂式末~堀之内式のものかほとんどを占め、ごく微量ながら諸磯式のものも散見された。埋没谷の底近くからは遺物はほとんど出土していない。また、遺物包含層の状況は、層位的なものではなく、各型式の土器片などがほとんど無秩序に混入していた。したがって、埋没谷が30~40cmほど埋まってから、既に周辺に形成されていた集落跡から、上などの移動とともに土器片や石器などが流入埋没し、遺物包含層ができあがったものと考えられる。

今回の発掘調査区は、昭和53年度の発掘調査区とは50m余りしか隔たっていない。出土遺物の内容はほとんど同様であるが、53年度の調査では埋没谷等は検出されていないようである。今回検出された埋没谷は小規模なものであり、かなり蛇行しているようである。この付近の地形が、以前はかなり起伏に富んでいた可能性がある。

出土遺物はコンテナ(545×336×150mm)26箱に及ぶが、遺物包含層という性格のため、小破片がほとんどである。このため、筆者の浅学も手伝って、報文中の土器分類等にはかなりの不備があったものと思われる。末筆ながら、記して御容赦を乞う次第である。

写 真 图 版



1. 発掘調査区全景（西北より）



2. 発掘調査区全景（東より）



3. 発掘調査風景



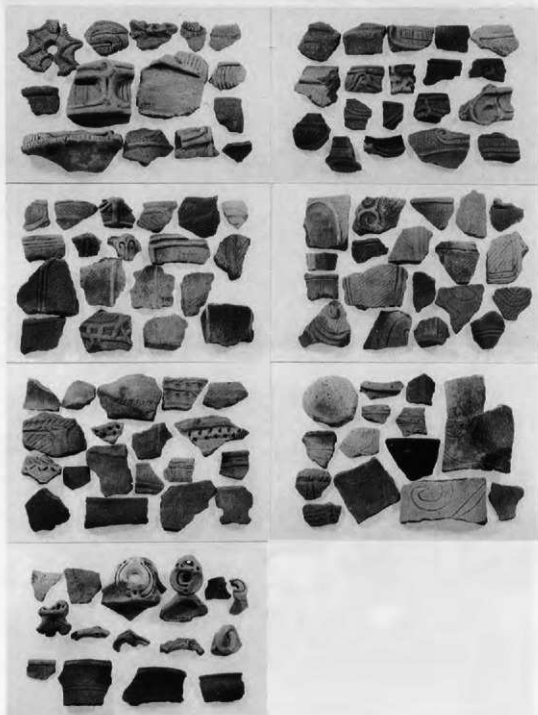
4. 第1トレンチ



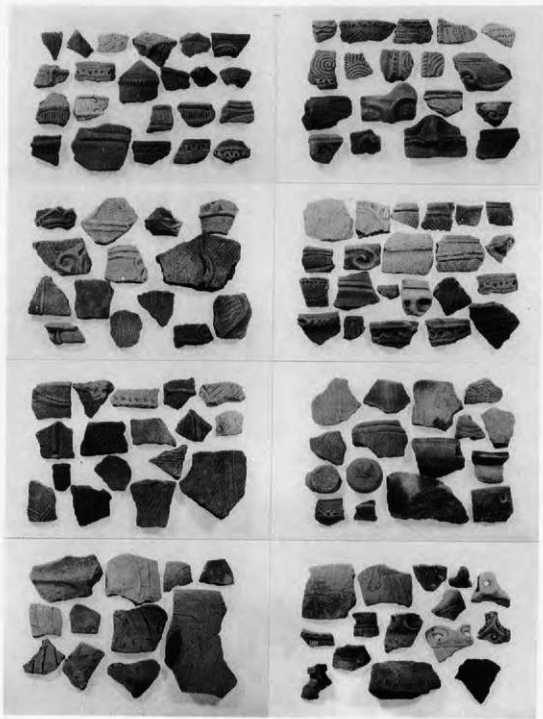
5. 第3トレンチ



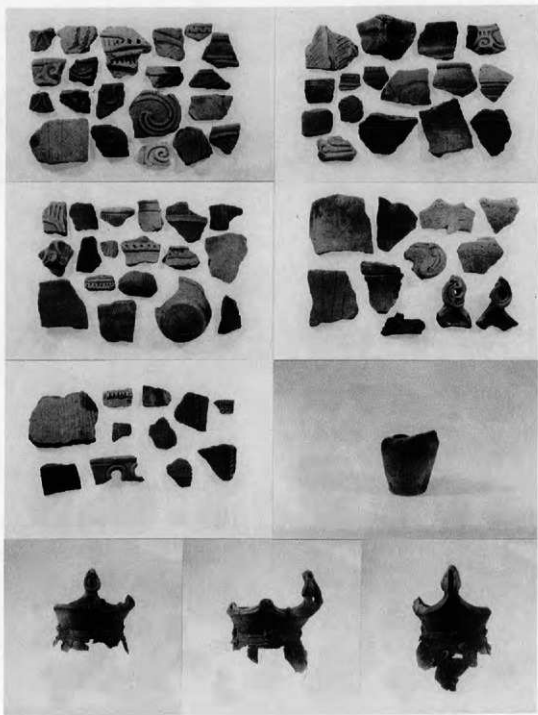
6. 第3トレンチ遺物出土状態



7. 第1トレンチ出土土器

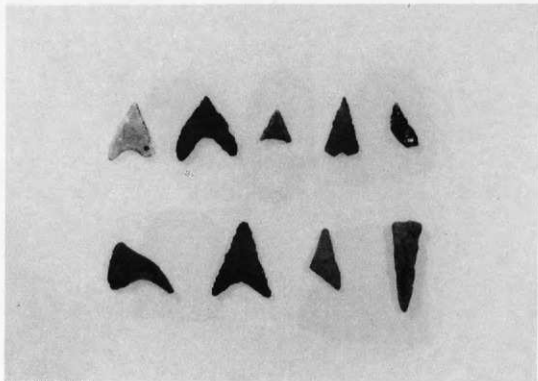


8. 第2トレンチ出土土器



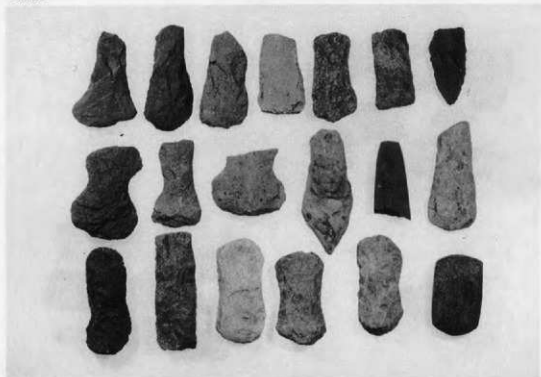


10. グリッド出土、表面採集土器

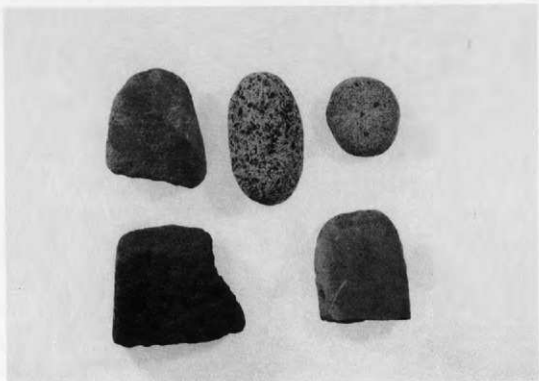


11. 出土石器 (1)

图版 8



12. 出土石器 (2)



13. 出土石器 (3)

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第16集

小 台 遺 跡 (第 3 次)

印刷 昭和62年 3 月 9 日

発行 昭和62年 3 月31日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会
印 刷 大 屋 印 刷 株 式 会 社

正 誤 表

部 分	誤	正
<p>p 5 p 4・B11層</p> <p>”・遺物出土状態の杭</p>	<p>調査区全測図 (1/160) ローム粒子を含む</p> <p style="text-align: center;">B 2 — 1 C</p>	<p>調査区全測図 (1/120) ローム粒子を多量に含む</p> <p style="text-align: center;">B 3 — 4 C</p>